

タイトル	ヨハン・ペツル「ファウステイン」と反啓蒙
著者	北原, 博; KITAHARA, Hiroshi
引用	北海学園大学学園論集(189・190): 49-64
発行日	2023-03-27

ヨハン・ペツル『ファウステイン』と反啓蒙

北 原 博

はじめに

ヨハン・ペツル (Johann Pezzl, 1756-1823) の『ファウステインあるいは哲学の世紀』*Faustin oder das philosophische Jahrhundert* (1783) は「オーストリア啓蒙主義で最初に圧倒的な成功を収めた小説」¹だとされる。ヴォルテール (Voltaire, 1694-1778) の『カンディード』*Candide, ou l'Optimisme* (1759) の影響を受けたこの小説では、カンディード同様に主人公が旅を通して師匠の教えとは違った現実、いまだこの社会は啓蒙されていないという現実を思い知らされることになる。そのたびにファウステインは「これが理性の勝利、人間性の勝利なのだ！」(48) と師に教えられた理想と現実との乖離を嘆くことになる。しかし、ペツルの小説では、ファウステインは最後に啓蒙の実現をヨーゼフ 2 世 (神聖ローマ皇帝在位 1765-90) 単独統治下のウィーンに見出して幕となる。つまり、最終的には師から受け継いだ教えが否定されることはない。

ペツルの小説はヴォルテールの小説とは異なり、今日の読者によって読まれることは極めて稀である。クラウス・ツァイリンガー²は『ファウステイン』の受容史を検討し、この 18 世紀末にはもっとも有名だったドイツ語の哲学小説の評価が 1848 年前後に一変していることに注目している。ペツルの風刺的な小説が描き出す具体的な現実社会の叙述は 19 世紀後半の教養市民の非政治的な美学ではもはや役割を失っており³、彼の小説は 19 世紀半ばの文学の評価指標である多義性にも欠けているという⁴。また、ヴィンフリート・クリークレダーによれば、そもそも 1780 年代のオーストリア啓蒙小説はヨーロッパ小説史の中の特異なジャンルであり、同時代の市民の感情や内面を描いたり人間学的範例を描いたりする同時代ドイツ語圏の小説とは異なり、同時代に関係した「暗闇の力に対する闘争といった啓蒙の継承としての風刺的・論争的な物語」であった⁵。ペツルの『ファウステイン』はまさにヨーゼフ時代のオーストリアの啓蒙主義小説の典型であり、18 世紀ヨーロッパという特殊な時代状況と密接に結びついているからこそ、現代の読者にとって読みにくいものとなっている。とはいえ、それゆえにこそこの小説の理解は 18 世紀末のウィーン啓蒙に対する人々の評価に触れる手掛かりになると思われる。

『ファウステイン』では反啓蒙の出来事が繰り返して描かれる。それらは史実に基づきながら、ファウステインが事件に関与するというフィクションになっている。その中にはわずかではある

がフリーメイソンにかかわるエピソードが含まれている。フリーメイソンリーは啓蒙を妨げる勢力にとって啓蒙の結社として扱われているのである。しかも、エーディト・ローゼンシュトラウホ＝ケーニヒスベルクによれば、『ファウステイン』は当時イルミナーティの小説とみなされていたのである⁶。イルミナーティの結社とフリーメイソンリーとは本来別物ではあるが、ウィーンの場合は、とりわけイグナーツ・フォン・ボルン (Ignaz von Born, 1742-91) の率いるロッジ「真の調和」Zur wahren Eintracht がイルミナーティの結社と密接な関係を有しており、同ロッジはイルミナーティの養成所 (Pflanzschule) だとみなされていた。そうだとすれば、『ファウステイン』はイルミナーティと密接な関係のあるウィーンのメイソンたちの基本的な考え方を浮き彫りにしてくれると思われる。

本稿では、まず作者ペツルについて簡単に紹介したうえで、作品解釈に取り組みたい。作品の分析では、まずはファウステインのカトリック諸国の旅を取り上げ、作品における啓蒙理解を確認したうえで、フリーメイソン迫害やスペインの啓蒙的改革の挫折を通してファウステインが直面する不寛容・狂信を考察する。続いて、イギリスや植民地への旅を取り上げ、アメリカでの奴隷取引、ロンドンでの反カトリックの暴動を通して、非カトリック圏での人権侵害、不寛容、狂信を考察する。そして最後にファウステインの旅の終着点であるヨーゼフ2世のウィーンに言及したい。これらの考察をとおして、作者は、主人公が師匠の主張への反証を体験するという『カンディード』の構図を用いることで、同時代に蔓延する不寛容の害悪を徹底的に描き出し、それによって寛容の重要性を浮き彫りにするとともに、何が啓蒙を妨げているのかを明示しようとしたということを確認する。そして、この作品がヨーゼフの改革への当時の啓蒙主義者たちの大きな期待を映し出すとともに、反啓蒙勢力に対する啓蒙のネットワークの担い手としてのウィーンのフリーメイソンたちに対する共感の表明になっているということを明らかにしたい。

1. ペツルについて⁷

ペツルは、1756年にベネディクト会修道院のパン焼き職人の息子としてニーダーバイエルンのマラーズドルフで生まれた。1775年にはベネディクト会のオーバーアルタイヒ修道院の修練士になり、シャイアン修道院の修練院で修練期を終えた後、ペツルは自発的に教団を去った。そして、76年にザルツブルク大学法学部に入学し、同地で4年間を過ごしている。ザルツブルクでは、のちに『チューリヒ新聞』*Zürcher Zeitung* (1780年創刊) の編集者となるヨーハン・カスパー・リースベック (Johann Kaspar Riesbeck, 1754-86) と知り合い、友情を結んでいる。ザルツブルク時代の1780年、ペツルは『修練院からの手紙』*Briefe aus dem Noviziat* をチューリヒの出版社オレル・フュースリから匿名で出版するが、友人に修道院での体験を語るというこの本はベネディクト会の大学であるザルツブルク大学の不興を買う。大学はペツルがこの本の著者ではないかと疑い、たびたび尋問を行った。しかし、ペツルは自分の体験話を基にして友人のリースベックが書いたのではないかなどとして尋問を切り抜けた。そして、この年の8月にザルツブルクを立ち

去り、チューリヒに向かうことになる。チューリヒでベツルは、リースベックの手伝いをしたりしながら執筆活動を行っている。本稿で取り扱う『ファウステイン』もチューリヒ時代の作品である。この作品はヒットし、「続編」まで現れることになる。彼は同年ウィーンに移住し、フリーの著述家として活動する。ここで彼はアロイス・ブルマウアー（Alois Blumauer, 1755-98）の交友サークルに受け入れられている⁸。1784年にはフリーメイソンに加入する。もともとはボルンを中心とするロッジ「真の調和」への加入を希望していたようであるが、実際に加入したロッジは同ロッジと関連のある「慈善」Zur Wohltätigkeitである。翌年にはロッジ「ヤシの木」Zum Palmbaumに移ったが、1786年にはフリーメイソンリーを退会しており⁹、メイソンとしての活動期間は決して長くはない。また、詳細は不明であるが、ベツルはイルミネーティでもあったとされている¹⁰。1785年にはマリア・テレジア、ヨーゼフ2世、レオポルト2世の3代の君主のもとで宰相として改革を進めた政治家カウニッツ（Wenzel Anton Fürst von Kaunitz, 1711-94）の秘書となる¹¹。その後、ベツルは1786年から刊行された『ウィーン素描』*Skizze von Wien*をはじめ、ウィーンについての本を出版している¹²。1791年に、ベツルは信書検閲室 Chiffre-Kanzlei の役人となり、この時期からベツルは社交生活からほぼ引退していった。93年に結婚。最終的には帝国顧問および副室長となり、1823年に亡くなっている。

2. カトリック諸国での啓蒙

一般に『ファウステイン』はヴォルテールの『カンディード』の模倣作とされている¹³。実際、師の教えを素朴に信じていたヴォルテールの主人公もファウステインも、世の中を旅することで現実を体験し、師の教えへの懐疑を強めていくという構成になっている。『カンディード』の主人公はライプニッツの最善説が現実の個人レベルでは妥当しないことを体験し、最後は小さな地所での労働にいそむことになるのだが、ベツルの『ファウステイン』では、「哲学の世紀はすでに始まっている」という師の教えにもかかわらず、啓蒙はいまだ実現していないことを体験する。ここではファウステインの旅の前半を考察しよう。

2.1. ボニファーツの主張

『ファウステイン』において主人公に信念を植え付ける教師役はボニファーツである¹⁴。ファウステインはバイエルンのヴァンストハウゼン大修道院領の村役人の息子であるが、実父は修道院長であることが暗示されている。母親と修道院長の縁でファウステインは修道院で教育を受けることになり、ファウステインの教師となったのがボニファーツである。それではボニファーツはどのような考えを持った人物なのだろうか。

しかし彼のお気に入りの研究は哲学であり、お気に入りの考えはすべて真の知の有益な結果であった。つまり、啓蒙、人類に光を与えること、寛容、政治的活動、明晰な哲学的な思考

法であった。(13)

ボニファーツが考える啓蒙は、理性を用いる力を養成することにとどまらない。啓蒙には信条の多様性を認める寛容が求められている。ここで注目したいのは「政治的活動」への言及である。ボニファーツの啓蒙は単なる理念ではなく、理性的ではない社会のさまざまな矛盾を取り除こうとする政治的な活動にまでつながっていく。そして、彼の考える啓蒙はすでに「広がっている」(13) のであり、今まさに哲学の世紀なのだという。そこでファウステインは啓蒙の世紀の始まりについて師に尋ねる。

しかし、そもそも一体いつ哲学の世紀ははじまったのですか、とファウステインは先生に尋ねた。でも1700年ではないですよ。というのも歴史を思い出す限り、当時はともかくとも哲学的に暮らしていたというわけではありませんから。ちょうど1700年というわけではないんだよ、とボニファーツ神父は答えた。啓蒙は正確に年代を守っているわけではないからね。そもそも1748年という年を哲学の時代の創造の瞬間とすることができよう。当時は夜明けだった。でもフェルトゥスブルクとパリの講和以来完全な光となっている。それ以来、世界のすべての諸民族は兄弟のように結び付き、それ以来啓蒙によりどの国家も他の国家よりも前進しようと努力し、それ以来、理性を愛する人は誰でも渴望し、どんな心も真理と人間感情を渴望している。それ以来、君主は他の君主よりも寛容と啓蒙、思索の自由を自国で促進し、迷信、野蛮、狂信、愚かさ、嫌がらせ、悲惨さを自分たちの諸国民から遠く追放するのに熱中している。以来、友よ、それは理性と人類の一般的な勝利であり、啓蒙された哲学的な世紀なのだ。(14-16)

ボニファーツは哲学の世紀の始まりを1748年、つまりオーストリア継承戦争を終結させたアーヘンの和約の年に定めている。そして、さらにボニファーツが言及するのは、7年戦争に終結をもたらした1763年のフェルトゥスブルク条約、パリ条約である。両条約によりドイツ語圏におけるプロイセンの優位が決定づけられ、フランスに対するイギリスの勝利が確定したのであるが、これによりヨーロッパに一定の秩序が見出されることになる。ボニファーツは不寛容のもたらす戦争という暴力の終結に寛容の時代の到来を見出したのである。

2.2. カトリック啓蒙とバイエルン

啓蒙の時代はカトリック教会内部の諸改革にも影響を及ぼしている。ファウステインとボニファーツは教会にも啓蒙が浸透している証左として、イエズス会の廃止や祝日の削減に歓声を上げる。祝日の削減は1772年の小勅書に基づくもので¹⁵、根拠のあいまいな祝日が廃止されたのであるが、ファウステインはこれを受けて「古い聖なる偏見」(18)を取り除いてその分を労働に振

り分けることは理にかなったことだと考える。そこでファウステインは削減対象となった祝日に礼拝ができずに飲み屋にたむろしていた民衆の前で模範を示そうと労働を始めるのだが、この行為は人々の怒りを買ひ、ファウステインは民衆に暴力を振るわれる。この時、息子を助け出そうとした父親も突き倒されて、父親はこれがもとで亡くなってしまふ。ファウステインはのちに師ボニファーツを亡くすのだが、ボニファーツは宗教的寛容に反発する民衆の反乱に巻き込まれて亡くなる。ファウステインの啓蒙の普及に対する懐疑は、父親の死に始まり、師匠の死で頂点に達する。しかも、彼らの死は、旧弊にとらわれた民衆たちによって引き起こされるのである。

啓蒙されていないのは民衆だけではない。彼らの修道院もまたいまだ哲学の世紀とは程遠い状況にあった。確かにヴァンストハウゼン修道院は「非常に博識であるという評判」(11)を得ていたのであるが、そこでは大方の啓蒙主義者には受け入れられないような異端や急進的啓蒙主義の理論が議論されたりソツツイーニ主義や無神論が教えられたりするといった理論面の問題があるのみならず、修道院の自然学者が院長や同僚の気晴らしのために実験動物を苛んでおり、実践面でも腐敗していた。ヴァンストハウゼン修道院の修道士たちは、その評判にもかかわらず、決して啓蒙されてはいなかったのである¹⁶。そのような状況であったので、ボニファーツとファウステインによるヴォルテールの読書は許容されない。ボニファーツはその蔵書ゆえに異端の嫌疑をかけられて穴倉に閉じ込められてしまい、弟子のファウステインは修道院領を追放となり、現実を思い知らされる旅に出ることになる。彼がまず向かったのはミュンヘンであるが、ここでもアカデミーが人々に尊重されるどころかアカデミー会員のひとりが民衆の暴力にさらされているのを目の当たりにする。さらに無原罪の御宿りを批判した小さな本で自らスキャンダルを引き起こして、ファウステインは友人のトラウバッハとイタリアへ逃亡することになる。

2.3. ナポリのフリーメイソン迫害

ファウステインはまずヴェネツィアに向かう。そこではゴンドラに乗り合わせたフランス人、ブリテン人が「海との結婚」を侮辱してガレー船に送られるという事件に巻き込まれ、ファウステインは政治的な不寛容を目の当たりにする。ヴェネツィアを追放になったファウステインは友人の紹介でナポリに向かうことになる。

ナポリでの出来事を扱った第11章はフリーメイソンを迫害する布告から始まる¹⁷。ナポリのフリーメイソン迫害は史実に基づいており、迫害の布告は1775年に発布されたものである。ファウステインはこれを耳にして、「ドイツの偉大な諸侯ですらメンバーであるこの結社に対して、どうしてかくも狂信的に腹を立てることができるのか、彼には理解できなかった」(78) ために気が遠くなる。周知のようにプロイセンのフリードリヒ2世をはじめドイツの諸侯にはフリーメイソンリーのメンバーがいたし、神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世の妹でナポリ王妃マリア・カロリーナは、フランス革命勃発まではフリーメイソンリーの庇護者であった¹⁸。それにもかかわらずナポリではフリーメイソンの迫害が行われたのである。

この布告により、ナポリのメイソンたちは逮捕される。ファウステインはフリーメイソン迫害の背景として、フリーメイソンたちが迷信や宮廷の陰謀の妨げになるために、僧侶、宮廷のおべっか使いたちが策略をめぐらしたのだと考える。

僧侶たちの大群、そして高慢な宮廷のおべっか使いどもはみな、ひそかに策略がうまくいったことに歓声を上げた。そして公衆の面前での辱めや恐ろしい罰により、開花しつつあった結社を芽のうちにつみ取ったことを喜んだ。人類の友人たちをひるませて、彼らが国王を聖別して兄弟とし、聡明にしたり、迷信や宮廷の陰謀の思い通りにならないようにしたり、自律的な支配者にしたりするような気をもう決して起こさないようにしたことを喜んだ。(83)

ここで「人類の友人たち」とはもちろんフリーメイソンのことである。フリーメイソンの結社を放置しておく、国王が加入して啓蒙されてしまうと僧侶や宮廷人たちが恐れたというのである。つまり、ここでフリーメイソンの迫害は、啓蒙専制君主の誕生を阻止しようとしたのだと理解されている。『ファウステイン』のテキストに注釈を付しているヴォルフガング・グリープによれば、この事件には国王がフリーメイソンへの加入を望んでいたという背景があるという¹⁹。ここで作者ペツルはフリーメイソンリーを啓蒙と結びつけ、理性に基づく自律的な人間を養成する組織と理解している。フリーメイソンリーは確かに啓蒙の結社とされ、啓蒙の時代の公論のネットワークという側面を有しており、その基本的な理念には寛容があるし、ロッジでの儀式や作業を通じて個々のメンバーの道徳的な完成を目指している。実際には、フリーメイソンリーの中にはオカルト的な要素を持ったものもあったが、ファウステインはフリーメイソンリーを啓蒙促進の組織ととらえており、道徳的に向上していったメンバーが国家の中枢に入ることにより寛容で理性に基づいた社会に展開していくというイルミナーティの考え方に接近している²⁰。そしてこのエピソードはイルミナーティの結社の影響を受けたフリーメイソンのグループへの作者の共感の表明ともなっている。

ナポリのフリーメイソンたちが逮捕された後、ファウステインは聖ヤヌアリウスの祝祭に出かけていく。この祝祭のメインイベントは、聖遺物である聖ヤヌアリウスの乾燥した血液が液体になるという奇跡であるが、この時は奇跡が起らない。この悪い兆候は異端者と結びつけられ、さらに民衆は異端者とフリーメイソンとを結びつけ、激高する。そして、この民衆の狂信に同意できない人々は民衆からリンチをうける。ファウステインもまた殴られ、前歯が2本抜けてしまう。ファウステインはここでも民衆の狂信の暴力を体験することになる。さらにファウステインはフリーメイソンを擁護する発言をしていたために、自身がフリーメイソンであると疑われ、逮捕されそうになるのだが、これを知った知人に助けられてナポリを逃げ出すことになる。

2.4. シエラ・モレナでの啓蒙主義的改革の敗北

ファウステインはひたすら啓蒙と程遠い現実を突きつけられるというわけではない。各地で彼は理性的な人々と知り合っており、彼らはファウステインの援助者となったり、旅の道連れとなったりしている。明示はされていないけれども、ファウステインの行動は（植民地での体験を除けば）常に何らかの啓蒙のネットワークと繋がっており、ファウステインが啓蒙とは無縁な不寛容の集団の中に一人入り込むことは稀である。そればかりかファウステインは、「無知、迷信、狂信、怠惰、愚かさ、不寛容の神殿」(99)として描かれてきたスペインにおいて啓蒙の実現を体験している²¹。彼はジェノヴァで、スペインのシエラ・モレナでの入植事業のことを知り、ドイツ人入植者とともにスペインに渡る。この入植事業は史実で、啓蒙専制君主カルロス3世のもとパブロ・デオラビーデ・イ・ハウレギ（Pablo de Olavide y Jáuregui, 1725-1803）が事業を推進した²²。ドイツ人入植者の募集はテューアリーゲル（Joseph Kaspar Thürriegel, 1722-1800）²³が行っており、作品中では彼はファウステインの父親の戦友という設定になっている。その縁でファウステインはオラビーデの秘書となり、スペインのカトリック的啓蒙改革に参画することになる。

スペインが近づくともファウステインは急に怖気づく。彼のイメージ、つまりヨーロッパの啓蒙主義者のイメージでは、スペインは異端審問がまだまだ猛威を振るっている国であり、無原罪の御宿りを信じていないファウステインはスペインに着くなり異端審問にかけられて火あぶりになるのではないかと恐れたのだ。しかし、異端審問所は「1760年に榮譽をもって葬られた」(105)と聞き、ファウステインは安心する。しかもファウステインが入植したシエラ・モレナでは、宗教的な寛容へと近づいている。プロテスタントの入植者も建前では許容されていた。それどころか入植地では修道院の設置が禁止され、住民の魂の心配をするのは教区の司祭だとされている(98)²⁴。さらに弔いの鐘や死者のためのミサが禁止されている。この作品ではたびたび修道士が非難されているのだが、今を生きる人々の魂の面倒をみる教区の司祭に本来の僧侶の在り方を認め修道院を否定する態度には、修道院で瞑想生活を送る修道士を社会に貢献しない存在とみなすヨーゼフ2世の教会改革に通底するものがある。ここには非生産的なものを軽視し、すべてを合理化しようとする態度が認められるのである。

しかし、啓蒙の精神での統治は長くは続かない。入植したカプチン会神父²⁵は民衆をけしかけて弔いの鐘を鳴らさせたり、死者のためのミサを執り行ったりして、シエラ・モレナでの宗教面での改革を骨抜きにしようとする。また、後ろ盾となっていたアランダ伯（Conde de Aranda, Pedro Pablo Abarca de Bolea, 1719-98）はパリ大使に左遷され²⁶、異端審問も再開される。国王の聴罪司祭の策略で、国王は偽の地獄の業火を見せられて病に臥せり、偽のマリアに異端審問の復活を誓わされたのだという。そして、オラビーデが異端審問にかけられ失脚してしまう。オラビーデは逮捕直前ファウステインにパリのアランダ伯を頼るように告げるが²⁷、ファウステインも逮捕されてしまう。このように、啓蒙専制君主の元でも、啓蒙を押しとどめようとする力に啓蒙は常にさらされている。そして、ここでも啓蒙主義的な改革をくじくのは僧侶と民衆の狂信

なのである。

2.5. ヴォルテールの死とカトリック諸国の旅の終わり

ボニファーツおよびファウステインの哲学の世紀・啓蒙の賛美と結びついているのが、ヴォルテールである。ヴォルテールの名前は繰り返し言及される。ボニファーツ神父が異端の嫌疑をかけられ、ファウステインが修道院領から追放になるきっかけとなったのもヴォルテールだったし、ファウステインがオラビーデの秘書をしているときには、ヴォルテールの手紙を読む機会を得て感動している。

ヴォルテールが最晩年にパリに戻ってきたとき、つまり1778年にファウステインはパリに滞在している。彼はヴォルテールの滞在先へと出かけるが、その前では人々が「ヴォルテール万歳」を叫んでおり、ヴォルテールが一部の人々に熱狂的に受け入れられている様子を知ることになる。彼はヴォルテールに会おうとするが面会はキャンセルとなり、「期待が裏切られたことの心痛」(176)によりファウステインは体調を崩してしまう。そして、気晴らしの旅行中にヴォルテールが亡くなってしまい、結局会うことはかなわない。

ヴォルテールが亡くなったとき、告解を済ませていたにもかかわらず、教会はパリの墓地への埋葬を拒む。ヴォルテールは死してなおも不寛容に直面することになる。そして、ファウステインの中で「偉大なヴォルテール」は「哀れなヴォルテール」に変化する。

哀れなヴォルテール、あなたは信じ込み、妄想をたくさんの個所で繰り返した。哲学という天上の炎、寛容、そして兄弟愛が偏見のかび臭い地域をこの世のいたるところでそして圧倒的に照らしたのだと。(186f)

この評価の変更はもちろん、ファウステイン自身がカトリック諸国を旅する中で体験した、哲学や啓蒙はまだ浸透していないという体験から徐々に醸成されてきたものである。その決定的な出来事がヴォルテールに対する教会の仕打ちだったのである。ファウステインは、自分が憧れた「素晴らしき精神の持ち主たちの祖国」(145)フランスは矛盾しており、「天才と愚行の国であり、哲学と狂信の国であり、よき趣味と厚かましきの国」(188)であることを実感する。

かくしてファウステインはドイツへ戻ることを決意する。カトリック圏諸国の旅は、啓蒙が浸透している人々のサークルはあるものの、哲学の世紀には程遠い現実をファウステインに体験させる。ファウステインは反啓蒙の立場をとる教会や狂信が力を持っている現実を思い知らされるのである。

3. 転換点

3.1. 恋愛とアーヘンのフリーメイソン迫害

作品でフリーメイソンリーが2度目に登場するのは、ファウステインがヴォルテールの死後、フランスからドイツに戻ってきて、ケルンに滞在しているときである。ファウステインは友人から、アーヘンのフリーメイソンが迫害に遭い、支援を求めて他のロッジに回状を送ったことを聞かされる。この迫害のきっかけは、1779年はじめにケルンの教皇大使カルロ・ベリソミ（Carlo Bellisomi, 1736-1808）がアーヘンの参事会にフリーメイソン・ロッジに対する措置を講ずるように促したことにある²⁸。ドミニコ会士やカプチン会士が説教でメイソンを激しく非難し、市参事会も迫害の布告を出した結果、アーヘンのロッジは集会の開催を見合わせ、一時オランダのフェールスに拠点を移さざるを得なかった。結局、この迫害はスウェーデン王グスタフ3世の尽力でやっと収束することになる。

これまでのファウステインならば、義憤にかられ、神父や参事会に対する批判をしてその地にいられなくなるか、狂信的な民衆に暴力を振るわれて逃げだすことになったと思われるが、アーヘンのフリーメイソン迫害を前にしてファウステインは何もしない。もちろんアーヘンのメイソン迫害に対してファウステインは完全に無関心というわけではないのだが、フリーメイソンに対する共感希薄である。ただ、メイソンを攻撃する「嫌悪すべきならず者の僧侶」によって、「いたるところで荒れ狂う迫害の精神についての心を苛む憤りがファウステインの恋愛をしばらくの間抑圧し、我々の時代の寛容や啓蒙が賛美されたことについて軽蔑を含んだ驚きを呼び起こした」（227）だけだった。

なぜ、ファウステインはこのような態度をとったのか。作品では、「この度はあまりにも自分の恋と恋人にのみこめこんでいたので、世界のほかの何かに感覚と思考を開いておくことができなかった」（226）とされている。確かに、この事件を知ったとき、ファウステインはクレールヒェンという少女と恋仲だった。クレールヒェンとの出会いはケルン大聖堂にある東方の三博士の聖遺物の傍らであった。これまでの言動が示す通り、もちろん彼は聖遺物を信じていない。その彼が、聖遺物の傍らで熱心に祈る少女に恋をし、彼女と親しくなろうとせつせと教会に通い礼拝を通じて徐々に距離を縮めていき、恋仲になる（221）。ところが、このクレールヒェンはファウステインが思うような少女ではない。クレールヒェンはいとこなる人物と共謀して、ファウステインを泥酔させた挙句、ヘッセン＝カッセルの軍隊に売り渡す。当時、ヘッセン＝カッセルは自国の軍人を傭兵としてイギリスに送っており、派遣された兵士たちはさらにアメリカへ送られ、植民地をめぐる戦闘に従事していた。『ファウステイン』ではこうした傭兵取引に対する批判も描かれているのである。かくしてファウステインは恋と酒によって蒙昧に陥ることで、今度はイギリス、アメリカへの旅に出ることになる。

作者にとって、アーヘンのフリーメイソン迫害のエピソードは、ファウステインの理性が恋に

よって鈍っていることの現象形態にすぎないのかもしれないが、そもそもファウステインが恋に落ちたのは、ファウステインがカトリック諸国での寛容・啓蒙の実態を体験し、哲学の時代に対する信頼が揺らいでいたことと無関係ではない。啓蒙が普及しない時代状況に対する失望がファウステインの理性を曇らせている。まさにそのタイミングでファウステインは恋に陥り、その結果、ナポリの場合とは異なり、アーヘンのフリーメイソン迫害に対する反応を鈍らせているのである。

3.2. フリーメイソンによる待遇改善

カッセルの軍隊に連れてこられたファウステインは、顔の傷の類似から脱走兵と間違えられてフォン・ルンテン大尉のもとに引き出される。そこで、彼はかつてガスナーを批判して暴力を振るわれたエピソードを語るのだが、その時に助けてくれた軍人がフォン・ルンテン大尉であることが判明し誤解は解ける。しかし、軍隊から解放してほしいというファウステインの願いは却下される。

興味深いのは、この場面でわざわざフリーメイソンリーへの言及があることである。ファウステインが自分は軍人にはふさわしくないことを説明するために、ナポリでの出来事、つまりメイソンの受難と聖ヤヌアリウスの祭りで自身が受けた暴力の話をする、大尉は自分がフリーメイソンであることを明かし、ファウステインを直ちに糧秣係の下士官に任命し、カッセルに着いたらずぐに軍事局に配属すると約束する(246)。そして、彼はファウステインを部下としてではなく、友人として遇するのである(247)。ファウステイン自身はメイソンではないが、ナポリでの言動からも明確にフリーメイソンリーの共鳴者である。そして、フリーメイソンというキーワードがファウステインの待遇を改善させたのである。

4. ヨーロッパの二重基準とボニファーツの死

4.1. ヨーロッパの二重基準

ファウステインの部隊はアメリカに送られるのだが、スペインの捕虜となり捕虜交換で解放されることになる。しかし、ファウステインは病気のためジャマイカでの療養を余儀なくされる。病気が癒えたファウステインは大勢の奴隷を抱える大商人マニフルのもとで働く。あるときファウステインはギニアに派遣され、奴隷売買の実態を自分の目で見る機会を得るのであるが、そこで彼が見たのは奴隷商人による非人道的な振る舞いであった。ジャマイカに戻ったファウステインは以下のように独白する。

いわゆる自然権や称賛された人類愛は、おそらく家にあるヨーロッパの本の中だけにあるのだろう。—それに宗教！…もしこれらの奴隷仲介者たちや奴隷に対する暴君たちが無神論者でないのならば、この世にはもはや無神論者は絶対にいない。(275)

ファウステインは奴隷に対する非人道的な扱いを目の当たりにして、ヨーロッパ人の振る舞いのダブルスタンダードや隣人愛を説くキリスト教の信仰との矛盾を認め、無神論者の振る舞いだと断定する。この「無神論」もまたファウステインの出会った宗教面での反啓蒙のヴァリエーションとなる²⁹。そして、奴隷労働から収益を得ているマニフルのもとにすることが耐えがたくなり、ファウステインは帰国を決意する。偶然マニフルの命の恩人となったことで帰国が叶うのであるが、ファウステインは帰国のための渡航費のみならず、500ギニーの現金と50ポンドの年金を受け取ることになる。皮肉なことに、ファウステインは奴隷を搾取して得られた利益から年金を得ることで、のちに啓蒙が実現した理想の地での生活の基盤とするのだ。

4.2. 狂信の勝利？

帰国の途に就いたファウステインは、寄港地ニューヨークで借金の為に売られていたかつての師匠ボニファーツを請け出し、ポーツマスに上陸する。そして、ボニファーツの希望で彼らはヨーロッパを追われた哲学者たちの避難所となった町ロンドンに立ち寄る。しかし、「世界で最も哲学的な国」(293)だとボニファーツが主張するイギリスで、彼らはゴードン暴動に巻き込まれる。これはカトリックに対する差別が部分的に撤廃されたことに不満を抱いていたプロテスタントがジョージ・ゴードン卿(1751-193)に扇動されて1780年に起こした暴動で、暴徒がカトリックの礼拝堂やカトリック信者たちの家を放火した。カトリックであるために迫害される立場にあるファウステインたちは、自分たちの宿で嵐が過ぎ去るのをやり過ごそうとするが、結局暴動に巻き込まれてしまう。礼拝堂から教会の備品が略奪され燃やされるのを見たボニファーツは、火中からミサ典礼書を救い出そうとして暴徒によって銃床で殴られ、致命傷を負う。ボニファーツは不寛容の暴力から自らの信仰を守ろうとした結果、命を落とすことになる。ファウステインは父親のみならず師匠までも、民衆の狂信、慣習や宗教への民衆の固執によって失ったのである。ファウステインはその旅の中で、国家権力や教会権力の暴力にもさらされてきたが、啓蒙、哲学の時代の到来を拒む大きな要素が「民衆」にもあることが、この小説の数々のエピソードから浮き彫りになる。

ファウステインは啓蒙の精神よりも不寛容や迫害の精神のほうがはるかに強力であることを確信せざるを得ない状況で、いまだ人間性と理性の普遍的な勝利には至っていないことを死の床にある師に確認しようとする。

胸が張り裂けるような苦しみを与えないでくれ、と弱弱しいどもった声でボニファーツは答えた。あなたが私のお気に入りの理念から離反してしまったという苦悩を墓場にもっていかせないでくれ。それはいまだ実現していないが、間もなく、1800年になる前に、実現されるだろう、少なくともわれらが祖国ドイツで。祖国の北と南には二人の君主がおり、彼らは間もなく、もう少し生きることが許される君たちが感謝にみちて狂喜しながら歌うということ

を実現させるだろう。今や理性と人間性の普遍的な勝利であり、真の哲学の世紀であると！この時代は訪れるだろう、間もなく訪れるだろう、そのために私は生き、そして死ぬのだ…(307f.)

ファウステインが体験してきたように、理性や人間性はいまだ勝利していない。それどころか反啓蒙は宗教、政治といった制度のみならず、僧侶、宮廷人から民衆に至るまでに浸透しており、あまりに強固である。こうした反啓蒙に対して、啓蒙専制主義における理性の統治が啓蒙の可能性として浮上してくる³⁰。ポニファーツは、ドイツの南北の君主、つまりヨーゼフ2世とフリードリヒ2世に期待し、真の哲学的な世紀の到来が近づいていることを予言する。

5. 啓蒙専制主義と啓蒙の夢の実現

ファウステインはいよいよドイツに戻る。ハンブルク経由³¹で訪れたベルリンでファウステインは「余のもとでは、誰もがその欲するところのものを信じることができる、もしその者が誠実であるのなら」(317)というスローガンが実践されているのを見、フリードリヒに戴冠した哲学を認める。だが、「精神と権力の結合というコンセプト」がヴォルテールのベルリン滞在の結末から非現実的であることが明らかになっていたことを考慮に入れば³²、ファウステインの判断はあまりに素朴である。

その間にオーストリアのヨーゼフ2世の評判がドイツ・ヨーロッパ中へと広がっている。ベルリンで北の君主の哲学的な思考法を確信したファウステインは、南の君主のもとでの理性と人間性の勝利を確信したいと望み、オーストリアやハンガリーの人と話す機会を求めてライプツィヒの見本市へと向かう。そして、同地で友人のトラウバッハと再会し、友人に促されて、二人でウィーンに移住することになる。

ヨーゼフ主義のウィーンには最終章である第43章が割り当てられている。その表題は「玉座に就いた哲学」Die Philosophie auf dem Thronであり、まさに啓蒙専制主義に対する称賛がタイトルとなっている。この章ではヨーゼフによって既に行われた寛容令や様々な教会改革、教育改革などの諸改革が列挙され、ファウステインは「心の底から、全身全霊を込めて、誰からも愛されるヨーゼフを称賛した」(374)。ここではヨーゼフの通り名として「誰からも愛される者」der Allgeliebte が用いられている。作品でヨーゼフの通り名としてこの表現を用いていることから、1780年代前半、外からウィーンを眺めていたペツルは、ヨーゼフの改革が広く好意的に受け入れられていると希望的観測をしていたことがうかがえる。

周知のごとく、ヨーゼフ2世の改革は啓蒙主義者たちとの協働関係にあり³³、多くの啓蒙主義者たちがフリーメイソンであり、彼らの中にはゾンネンフェルス(Joseph Sonnenfels, 1733-1817)のように皇帝のプレーンとして改革を推進したり、文筆活動を通じて改革を擁護したりする者たちが含まれていた。最終章ではフリーメイソンリーに対する言及はないが、ヨーゼフの改革への

作者の期待は、皇帝と協働関係にあったウィーンのフリーメイソンたちへの期待でもあったのである。

ウィーンで理想の社会を見出したと信じたファウステインたちは今後どうするのか。

ファウステインはトラウバッハに提案した。友人たちと文通して新しい時代を始めよう、つまり啓蒙された南ドイツの時代を、ヨーゼフの時代を始めようと。そして1780年をこの時代の節目の年と定めたいと。(378)

彼らは、旅を通して築いてきた友人ネットワークを通じて、啓蒙が普及したウィーンの状態を伝えることで、社会を変えていこうとする。しかし、彼らはウィーンで社会的活動をするわけではなく、ひたすら啓蒙の享受者・観察者の立場にとどまる。学校を作り、民衆教育に携わった師ボンファーツとは異なり、ファウステインは反啓蒙に対して自ら行動するのではなく、専制君主の権力に反啓蒙との闘いを委ねてしまう。

国民劇場と宮廷図書館、グレップファーの書店は、自分たちの教育と楽しみのために彼らがもっともよく訪れる場所である。そのほかの点では、彼らはほどほどの収入で、どの哲学者の望みでもある至福の自由のうちに暮らしている。(380)

彼らの自由を保障するのは、植民地の富裕な商人からもらった年金とトラウバッハが相続した遺産による利息である。つまり、彼らは不労所得で理想的な社会を生きていこうとするのだ。もちろん、ファウステインにとって重要なのは自由に思索できることであるが、彼の年金は彼が痛烈に非難した搾取による利益を原資としているという皮肉な状況が生じている点は看過できない。ファウステインの人権感覚と自らの享受する特権への自覚のなさは、この作品にしばしば認められる単純さの表れでもある。

おわりに

『ファウステイン』では、師匠であるボンファーツ神父の「現在は哲学の世紀である」という主張にもかかわらず、人々は啓蒙されていないという現実を繰り返し体験することで、師の主張が疑問に付される。確かにこの構図は『カンディード』を思わせるものであるが、ヴォルテールの風刺小説とは異なり、ベツルの小説では師の思想自体が否定されることはない。師の影響によりファウステインの基本的態度となった理性の行使、寛容の尊重は揺らぐことがない。むしろファウステインを不寛容に直面させることで、不寛容のもたらす害悪を描き出し、それによって寛容の重要性を読者に訴えているといえる。作品の結末が示すように、主人公ファウステインは観察者にとどまるのだが、作者ベツルはこの作品によって寛容思想を広めようとしている。その意味

でペツルは哲学的な風刺小説を書くことで公論形成に寄与しようとしているのである。

一方、ボニファーツの「現在は哲学の世紀である」という主張は、彼が民衆の狂信によって致命傷を負うように、妥当性を欠く判断だといえるかもしれない。しかし、死の床でも揺るがぬ啓蒙の到来へのボニファーツの確信は予言となり、ファウステインはベルリンとウィーンでこの予言の成就を確信することになる。啓蒙専制君主への期待が楽観的であったことは、ヨーゼフ2世の治世を後から検証してみれば否定できないのであるが、ヨーゼフ主義への失望を体験していない1783年のこの作品は、まさにウィーンの啓蒙主義者たちの間での期待と熱狂とを映し出した作品だといえる。そして、作品にさりげなく挿し込まれたフリーメイソンリーに対する肯定的な態度は、作者自身がこれから参加したいと望んでいた啓蒙主義者の交友関係、その代表的なネットワークであるフリーメイソンリーに対するささやかなアピールだといえるのである。

テキスト

Johann Pezzl: *Faustin oder das Philosophische Jahrhundert*. Mit Erläuterungen, Dokumenten und einem Nachwort von Wolfgang Griep. Hildesheim 1982.

引用に際してはカッコ内にページ番号のみを記した。

註

※本稿は日本オーストリア文学会 2022 年度秋季講演会 (2022 年 10 月 9 日, オンライン開催) における発表「カトリック啓蒙とフリーメイソンリー——ヨハン・ペツル『ファウステインあるいは哲学の世紀』について——」の発表原稿を基に、加筆修正したものである。

- 1) Leslie Bodi: *Tauwetter in Wien. Zur Prosa der österreichischen Aufklärung 1781-1795*. Frankfurt am Main 1977, S. 184.
- 2) Klaus Zeyringer: „Geistvolle Satire“ und/oder „grobschlächtiges Konglomerat tendenziöser Anekdoten“? Zu Voltaires *Candide* und Johann Pezzls *Faustin*. In: *arcadia*. Bd. 25. H.2. 1990, S. 144-159.
- 3) Vgl. ebd., S. 146f.
- 4) Vgl. ebd., S. 150.
- 5) ヴィンフリート・クリークレーダー『オーストリア文学の社会史 かつての大国の文化』斎藤成夫訳、法政大学出版局、2019年、139頁参照。
- 6) Vgl. Edith Rosenstrauch-Königsberg: *Zirkel und Zentren. Aufsätze zur Aufklärung in Österreich am Ende des 18. Jahrhunderts*. Wien o. J. (1992), S. 309.
- 7) ペツルの経歴については、以下のものを参照した。

F. Kadrnoska: Art. Pezzl, Johann (1756-1823). In: *Österreichisches Biographisches Lexikon und biographische Dokumentation*. Bd. 8 (Lfg. 36, 1979), S. 22f. DOI:10.1553/0x00283d3b (2022年11月30日閲覧); Johann Pezzl: *Faustin oder das Philosophische Jahrhundert*. Mit Erläuterungen, Dokumenten und einem Nachwort von Wolfgang Griep. Hildesheim 1982; Clarissa Höschel: Wie Johann Pezzl vom Benediktinernovizen zum Freimaurer, Satiriker und Staatsbeamten wurde ... Ein biographischer Abriß anlässlich seines 250. Geburtstages. In: *Literatur in Bayern*, Heft 85 (2006), S. 38-46; Helmut Reinalter: Art. Pezzl, Johann (1756-1823). In: ders. (Hg.): *Freimaurerische Persönlichkeiten in Europa*.

Innsbruck 2014, S. 129-131.

- 8) Vgl. Reinalter, a.a.O., S. 129. なお、ブルマウアーもフリーメイソンである。
- 9) ペツルが退会した1786年には多くのメイソンがフリーメイソンリーを退会している。前年12月に皇帝ヨーゼフ2世がフリーメイソン勅令を發布してフリーメイソンリーへの統制を強めた結果、ウィーンのロッジは2つのロッジに統合されている。ペツルはそのうちのひとつ「真理」Zur Wahrheitに所属している。このロッジではマスターを務めていたボルンが退会してしまうと退会者が続出した。ペツルの退会がボルンと関係があるのかははっきりしない。
- 10) Vgl. Günter K. Kodek: *Brüder, reicht die Hand zum Bunde. Die Mitglieder der Wiener Freimaurer-Logen (1742-1848)*. Wien 2011, S. 179.
- 11) カウニッツもフリーメイソンだったとされるが、ウィーンのロッジとの関係は不明である。さらにイルミナーティだったともされている。Vgl. Hermann Schüttler: *Die Mitglieder des Illuminatenordens*. München 1991, S. 82; Kodek, a.a.O., S. 121.
- 12) これらは今日の18世紀末から19世紀初頭のウィーンについての歴史研究でも、しばしば一次資料として用いられている。
- 13) ただし、クリストフ・ジークリストはヴォルテールの『カンディード』、ヴェーツェルの『ベルフェゴール』と比べて、『ファウステイン』により哲学的風刺小説のジャンルに新しい機能が付加されると評価している。それは公論形成のプロセスを証明するものである。旅行文学では読者に旅の叙述を通じて他国の状態を伝えるのであるが、哲学的・風刺小説も質的転換を迎え、ペツルの小説では抽象的・形而上学的な理論ではなく、啓蒙の実現の度合いが問題になる。そのため、虚構のテキストである小説に「記録的なもの」が入り込むことになる。Vgl. Christoph Siegrist: Antitheodizee und Zeitkritik. Zur Situierung von Pezzls Roman „Faustin“. In: Herbert Zeman (Hg.): *Die österreichische Literatur. Ihr Profil an der Wende vom 18. zum 19. Jahrhundert (1750-1830)*. Graz 1979, S. 829-851, hier S. 835ff.
- 14) レスリー・ボーティも指摘しているように、ボニファーツの教えが『ファウステイン』の基本的立場を規定している。Vgl. Bodi, a.a.O., S. 187.
- 15) Vgl. Pezzl, a.a.O., S. 23*.
- 16) Vgl. Gideon Stiening: „Katholische Idioten“ Johann Pezzls Faustin-Roman als Beispiel einer Selbstaufklärung der Aufklärung im katholischen Raum. In: *Aufklärung. Interdisziplinäres Jahrbuch zur Erforschung des 18. Jahrhunderts und seiner Wirkungsgeschichte*. Bd. 33 (2021), S. 223-248, hier S. 228.
- 17) ヴォルガング・グリープの注によれば、ペツルはAnonym [Friedrich Clemens August Werthes]: *Geschichte des Schicksals der Freymäurer zu Neapel*. Frankfurt u. Leipzig 1779の記述を基にしている。Vgl. Pezzl, a.a.O., S. 35*f.
- 18) Vgl. Eugen Lennhoff, Oskar Posner: *Internationales Freimaurerlexikon (=IFL)*. Wien, München 1932, Sp. 1175.
- 19) Vgl. Pezzl, a.a.O., S. 37*.
- 20) フリーメイソンリーはイルミナーティの結社とは別の結社であるが、ウィーンのロッジ「真の調和」のようにイルミナーティの拠点となっていたロッジもあった。
- 21) エルンスト・ヴァンゲーマンは、ペツルにとってヨーロッパで最も暗黒の国はスペインではなく故郷のバイエルンだとしている。そしてスペインはすでに啓蒙の影響を受けた国であるが、バイエルンではイルミナーティ迫害が起こったように、啓蒙主義者が迫害され、その活動は停滞せざるを得ないほど敵対者がなおも強力だったとしている。Vgl. Ernst Wangermann: *Faustin und Pablo de Olavide*. In: ders.: *Aufklärung und Josephinismus*. Bochum 2016, S. 180f.
- 22) シエラ・モレナの開拓事業については以下を参照のこと。立石博高「啓蒙スペインの新定住地域開拓事業——その理念を中心として」『同志社大学外国文学研究』42 (1985), 87-122頁。

- 23) テューアリーゲルについては、以下を参照のこと。Karl Theodor von Heigel: Art. Thürriegel, Johann Kaspar. In: *Allgemeine Deutsche Biographie*. 38 (1894), S. 230–233 [Online-Version]; URL: <https://www.deutsche-biographie.de/pnd100993648.html#adbcontent> (2022年12月2日閲覧)
- 24) 作品では「シエラ・モレナの新定住地域のための諸規則及びその入植者の特別法」第77条が引用されている。なお、同特別法は立石前掲論文に訳出されている。
- 25) ヴァンガーマンによれば、特別法第77条にもかかわらず、ドイツ語を話せる教区司祭を見つけられなかったためにカプチン会士が入植しているという作品の設定は、史実に基づいたものだという。なお、ヴァンガーマンは、カプチン会士とオラビーデとの間の緊張関係においてベツルが見落としている側面として、カプチン会士がドイツの言語及び慣習の擁護者として活動していたという点を指摘している。Vgl. Wangermann, a.a.O., S.183f.
- 26) 実際にはアランダ伯がパリ駐在大使となるのは1773年であり、オラビーデの逮捕(1776年)とは直接連動していない。
- 27) スペインを離れた後、ファウステインはパリでアランダ伯に会い、資金援助を受けている。なお、アランダ伯はフリーメイソンであり、1773年に設置されたスペイン管区大ロッジのグランドマスターであった。Vgl. IFL, Sp. 1485.
- 28) Vgl. IFL, Sp. 1.
- 29) Vgl. Stiening, a.a.O., S. 242.
- 30) Vgl. ebd.
- 31) ハンブルクは啓蒙された都市であるが、プロテスタント教会の主任牧師ゲーツェのエピソードを挿入することで、狂信的な「宗派心」が批判されている。Vgl. ebd., S. 242f.
- 32) シュテューニングは、多様な反啓蒙を前にしてベツルには「啓蒙専制主義の権威だけが実践理性が生き残るための唯一のチャンス」だと思われたのではないかと推測している。Vgl. ebd., S. 244f.
- 33) 上村敏郎「啓蒙専制期ハプスブルク君主国における批判的公共圏の成立：フリーメイソン勅令をめぐるパンフレット議論に基づいて」『Quadrante: Areas, cultures and positions = 四分儀：地域・文化・位置のための総合雑誌：クアドランテ』No. 18 (2016), 147頁参照。